2025年4月27日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

勇気の出どころ

［マルコによる福音書16章1～8節、マタイによる福音書28章16～20節］

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

[1] 先週のメッセージから

　先週はイースター礼拝ということで、マタイによる福音書28章の最初の所と、今日も読んで頂いた28章の最後の部分16節～20節の所からお話しさせて頂きました。その時お話ししたことは、復活の主が、女性たちや、弟子たちに姿を現わされた時、過去の事などは何も言及されず、「おはよう」とか「あなた方に平安があるように」という挨拶の言葉を語りかけられた、という所から、そこには、彼らを全く受け入れている全肯定、大いなる赦しがあるのではないか、とお話ししました。そして今日読んで頂いたマルコ福音書の16章にも出て来るように、イエス様は「あなた方より先にガリラヤに行かれる」と言われるように、弟子たちを、主イエス様との出会いの原点に立ち返らせ、その出会いというものは「死」を超えたものであるということを告げているように思うということをお話ししました。今日もそのことをふまえながら、改めて気付かされたことを分かち合わせて頂ければと思います。

[2] 新しい世界をあなたにもたらすため

　映画やテレビドラマで、ある意味人気がある定番のテーマが「タイムスリップもの」だと思います。そこではいつの間にか私たちが生きている「時間」が前後に動いてしまう設定があります。そこでどういうことが起こるかと言うと、過去のやり直しとか、或いは、悪いことが起こる未来を先に行って状況を変えるとか、人を救出するとか、そういう時に「時をかける」人間になって行くということです。これは荒唐無稽と言えば荒唐無稽なのだと思いますが、その背景には、「祈り」とか「思い」というものがあると思うのです。それこそ、「人生もう一回あの時からやり直したい」とか「未来の禍から逃れさせたい」という切実な思いで、SF的な形を取りながらも、そこにはリアリティがあると思うのです。そんな「時間旅行」みたいなことは実際には起こらないからこそ、人はどこか憧れをもってそういうドラマを楽しむのかもしれません。そしてこれは違うかもしれませんけれども、もしかしたら仏教の「輪廻」つまり「何度も生まれ変わる」という思想も、辛く苦しい人生に対して、また違う命を与えられていく世界があるという、一種の慰めのようなものを提示しているのではないかと思います。

　それで、私は、聖書のイエス様の復活の記事を読んで、改めてイエス様の復活が私たちのもたらしたもの、もたらしてくれるものって何なのだろう？と思ったのです。これは勿論タイムスリップでも輪廻でもないと思います。聖書は一面とてもドライです。私たちは誰も皆土くれから造られていて、その生涯は、始まりがあり、終りがあることを告げています。それはどうしてか。人間は罪人だからですね。「罪の支払う報酬は死」だとパウロは語りました。私たちは例外なくいつか死にます。それは、イエス様が肉体を持って死に、墓に葬られたようにです。変な話、イエス様の死は本物です。誰よりもむごたらしい死を死なれました。ですから、復活の描写の中で、女性たちはマルコ16:8で「震えあがり、正気を失った」とか「恐ろしかったからである」と言っていたり、マタイ28:16で「そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」とあるのは、本当にそうだったからですよね。私たちがそこにいても、簡単には受け入れられないことが起こったということです。

イエス様が死から復活したことを人間に告げたのは、白い衣を着た若者、つまり次元が違う所、天から送られたみ使いです。このみ使いは言いました。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」。―「ここにはいない」、最早あなたの常識の中にはおられないのだと。そして、そのイエスはどこかに去ってしまったのではなくて、「先にガリラヤに行かれる」と言うのですね。あなた方と出会うのを待っていると。人間は、死んだ者が復活したと聞いて却って恐れを抱いたり、不信仰になったりするけれども、むしろイエス様の方が新しい世界をあなたにもたらそうと、あなたを待っている、と言うのですね。そうです、復活の主が私たちに下さるのは、タイムスリップのようなSF的なことではなくて、新しい世界の始まりなのです！

[3] 「わたしは既に世に勝っている」という「光」

実は私は、週報にも書いたのですが、最近DVDで、ヘレン・ケラーとその家庭教師アン・サリバンのドラマチックな出会いを描いた『奇跡の人』と言う映画を観ました。モノクロの古い作品（1962年）ですが、ビックリするほど激しい映画でした。そこで私は「新しい世界」と出会うということはこういうことなのか！と思ったのです。ヘレン・ケラーは、皆さんご存じのように、生後17か月の時に病で、盲目、そして耳が聞こえなくなり、それゆえ言葉を語ることが出来ない障碍を身に受けました。ほぼ生まれつきということになりますから、これ私は想像しても想像しきれません。

映画で少女ヘレンは、食卓の食物を手掴みで次々に口に入れ、うめきながらテーブルを回っていました。裕福で過保護な家族はそれを放ったままにしています。そこでこのままではダメだとサリバン先生はヘレンと取っ組み合いをします。部屋はもう無茶苦茶です。このあたりの描写は壮絶で息を吞むほどです。凄い演技です。サリバン先生は、ヘレンを親から引き離し、離れでたった2週間で野獣のような少女ヘレンに「新しい世界」を開かせようとしたんです。指を握りながら繰り返し繰り返し指文字を作ってです。初めはヘレンは言葉の概念がないので、それはただの遊びにしか思えない。けれどサリバン先生は諦めない。彼女はヘレンに言うのです。「この世のものは、みな一瞬に消えてゆくわ。でも、あなたは感じる力がある。そしてあなたがすべて感じるものには言葉がある。言葉は、あなたに新しい世界の光を与えるわ。誰も闇に住んではいないのよ」と。そして、やはりダメかと思わせる出来事の後、井戸のポンプからの水を手に浴びせながら「water、water」と指文字を作ると、ヘレンの口から「ワダ…」という言葉が生まれてくるのです。それを見ていた家族の驚き。それからも忍耐強いサリバン先生とヘレンの一対一の学びは続いたようですが、私はこれを観て、ああ、もしかしたら、復活のイエス様が私たちの所に来て下さったというのも、目が見えず、耳が聞こえず、真の言葉を持たない者である私たちに、新しい世界を開いてくれるためであったと言えるのではないかと思いました。

私たち、何と、目に見える現実の時間軸が全てのように生きていることでしょうか。死んだらすべては終りという時間軸です。しかし復活のイエス様は、単に肉体の死から命に移ったというよりも、全く新しい世界の中によみがえり、そこで私たちを待っているということを示しているのではないでしょうか？復活された主はこう言われました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28：20）。―「世の終わりまで」です。「私たちの肉体が滅びるまで」ではなく。そして、「いつも」です！イエス様がよみがえったからには、その主がおられない時はどこにもないということ。これは凄いことです。私たちの死後ようやく主と共にあるのではなくて、もう、今、復活の主は私たちと共にいると約束して下さっているのです。もう私たちは「新しい世界」に覆われています。私たちのこの体と共に生きる命、というレイヤーの上に、主がもたらした復活の命のレイヤー（マント）が覆っている、と言ったら良いでしょうか。ですから、もう私たちはこの世にあって、新しい命の時間軸を生きていると言っていいのだと私は信じています。

ですから私たちは、生きる「勇気」が与えられるのです。思うに私たち、何か未知の領域に新しい一歩を踏み出す時があると思います。身近なことで言えば、体の手術を受けるとか、どうしてもあの人と会わなければいけないとか。どのようになるか分からない不安定要素がありますが、私たちそれ、やると思います。勇気が与えられるからです。飛び込もう！って。復活の主は、現実の時間軸の中に、先が見えないのに、未来を委ねて良いと思える大胆な心を与えてくれているのではないかと思います。イエス様が死んで復活して下さったおかげで、私たちの罪と死の問題はもう解決済みです。もう死後のことを怖れなくて良いのです。

イエス様は十字架にかかられる前におっしゃって下さいました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ16:33）。この言葉は、サリバン先生の言葉を借りれば正に光です！こんなオロオロしている私にも、天からの温かい光で、わたしイエスが見ているから一歩一歩歩き続けよとエールを送ってくれているように思えるんです。だから私たち、安心して人生の日を重ねて行きたいと思います。私たちは皆あの弟子たちのようにダメ人間かもしれませんけれど、主はその私たちをしっかり捕え、遣わされるのです。私たちの教会も、先に召された者が新しい世界の時間軸の中で主と共に生きて私たちを励まし、私たちもまた、弟子たちが力を得たように、与えられた道を進んで行きたいと思います。新しい時間軸の中で！お祈り致しましょう。

愛する主よ、復活の命は、かの日に与えられるということもそうですが、イエス様によってもう既に始まっていることを信じ、感謝致します。この世では苦難や悩みは尽きませんが、復活の主が言葉をかけ、そして離れずにいてくれる事実を忘れることがありませんように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。